# 鳥居起源

す
37

# 鳥居起源

す
37

す
37

鳥居起源

す
37

鳥居起源

す
37

す
37

鳥居之故実

す
37

## 鳥居之故実

鳥居　鶏栖　天門　華表　皆トリヰト訓ス
此外鳥居書様数多有之其ノ内四品是也文字ノ
書様随テ種々理説ヲ付好人コレヲ傳ルヿソノ元ヲ
不正大ナル謬也鳥居ハ只古代ノ門戸ニシテ直ニ戸ヲ釣
亦穴ニ居スル者ハ洞ノ前ニ是ヲ立夫ヘ萱草ヲ懸ル
後世皆萱ノ庇ノ如シ古代質素ノ制也今猶
天子御即位後大嘗會之時紫宸殿ノ廣庭ニ悠基
主基ノ兩神殿ヲ造立御鳥居ハ皆黒木ノ鳥居也
亦野々宮ノ舊跡今ニ黒木ノ鳥居木柴垣ナリ誠ニ
古ノ残レル所也　保高　按ニ鳥居ト云訓ハ通リ入ルノ
訓ニシテ鳥居ト書ハ借字也假名遣ニ人丸秘抄ニ曰
紫宸殿ノ後七間ノ中ノ門ヲ通入障子（トリヰシヤウシ）ト云鳥居ハ
門戸出入スル所ヲ云名ナリ亦伊勢両宮儀式帳ニハ
御門（ミカド）ト云テ鳥居ト云名見ヘ侍ラス亦不葺（フカズ）ノ御門（ミカド）ト
云惣テ伊勢両宮ニ不限諸社ニ鳥居皆御門（ミカド）ナラン
必字義亦理説ニ莫レ迷ヿ尓云

右鳥居起原人應需而書記畢

東武牛籠住
齋部保高

右鳥居起原人應需而書記畢

東武牛籠住
齋部保高
行齢七十一歳
天保十二年七月日

神田明神の地内ニ大工祖神乃宮有り前ニ鳥居有り皆通例ノ神明造り也是ハ神田明神下住居木匠須藤平蔵（此名）至水と云人同職輩一連して催し建立ノ宮也其鳥居ノ腰ニ立札有り 其文ニ云 重軽服經水ノ女汚穢不浄ノ者ハ必鳥居ノ下を通り 参詣ノ者鳥居ニ入ましハ其身忽清浄ニ相成ルと有り 夫故神社ニハ鳥居を立ると云ふ 保高 考るニ是全大成る誤なり重軽服（服忌）汚穢不浄を禁する為ニ鳥居ハ立る者也其故ハ 天子崩御の有時ハ都テ京都西桂川東山まて限り觸穢の地と成故諸社ノ鳥居青竹ニテメ切り通路止む是不浄と忌憚る故成へし ケ様の妄説迷ふ為ニハ或時須藤至水ニ面会致右鳥居乃腰立札ノ趣を問しニ至水答云鳥居ハ則人体を表したる物故其下を潜り候ハ忽ち其身清浄ニなる由答申候 実ニ片腹痛きる事

体を表したる物故不残濁りハ作を忽り

甚取清浄になる由答ハ実に片腹痛き事

笑ふに絶たり右様之者有之哉古への故実成

失ふ支にゆるをましむ遍し　云々

右鳥居之立札余りに珍説なることなり

末々為心得書添置者之

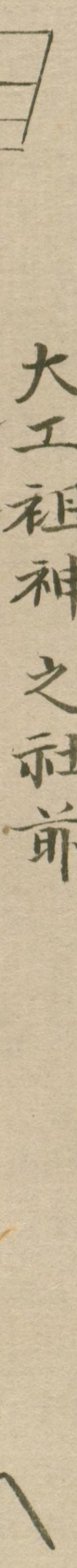
# 鳥居工図

鹿香鳥居
神明鳥居
伊勢鳥居
明神鳥居
児雲鳥居
山王鳥居
八幡鳥居
春日鳥居

今宮鳥居
三輪鳥居
志麻木割
牆之割

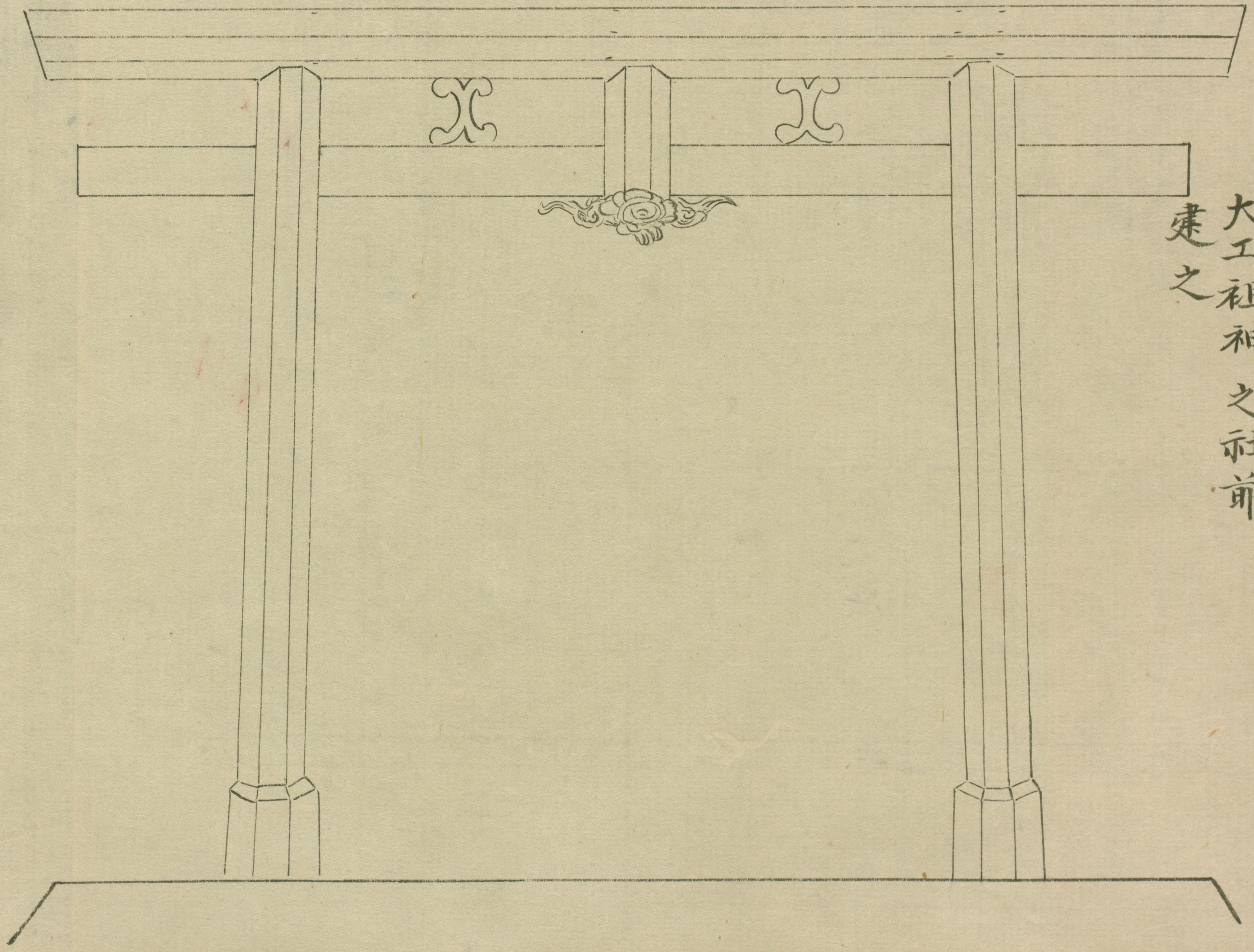
日本木匠祖神
根本鹿香鳥居
官匠
溝口内匠源林卿
石濱神明境内

大工祖神之社前



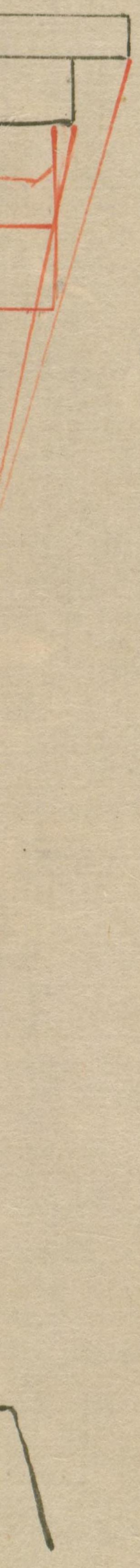
石濱神明境内

大工祖神之社前
建之

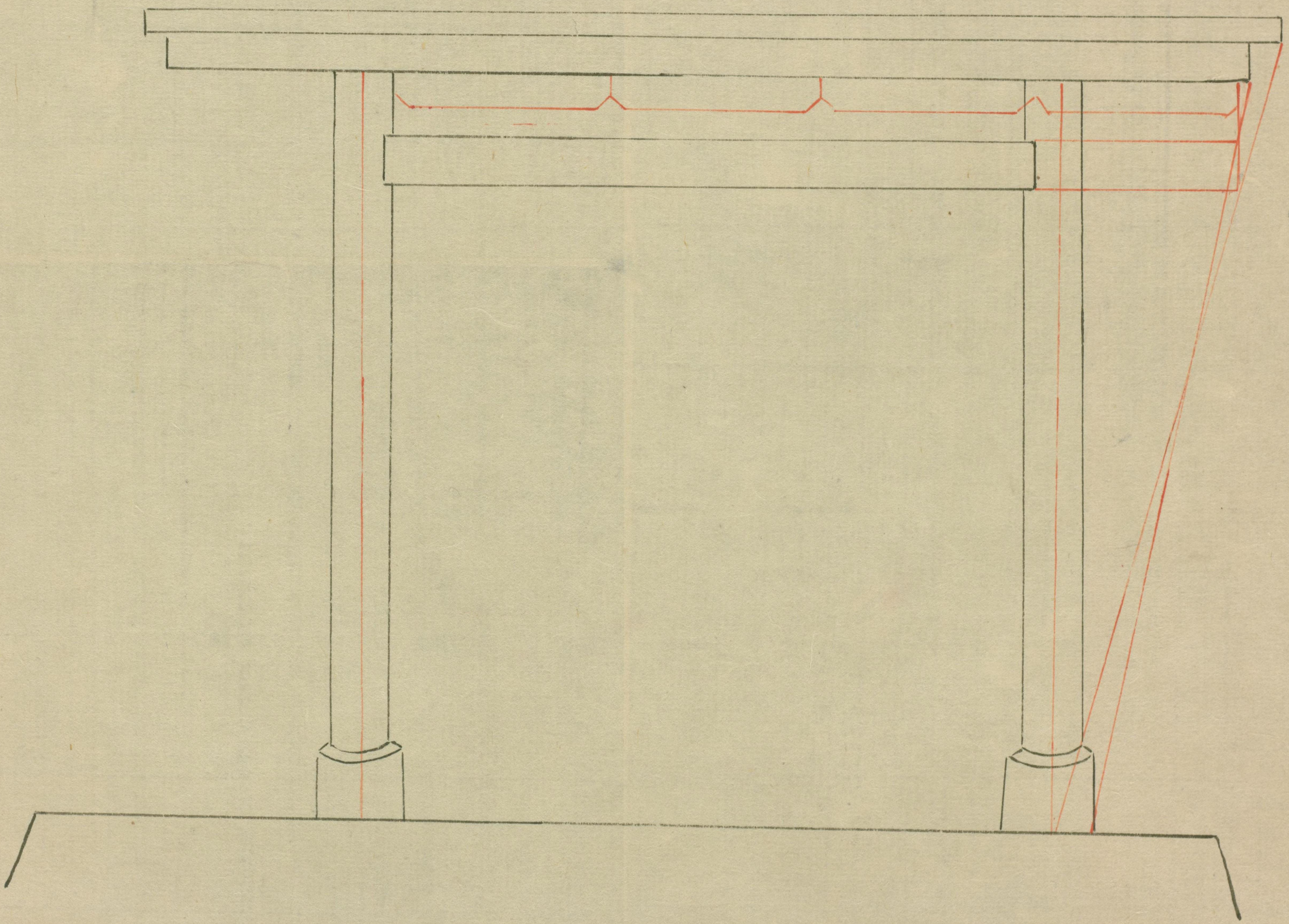


神明鳥居

反増構なし
割法如法



割法如法



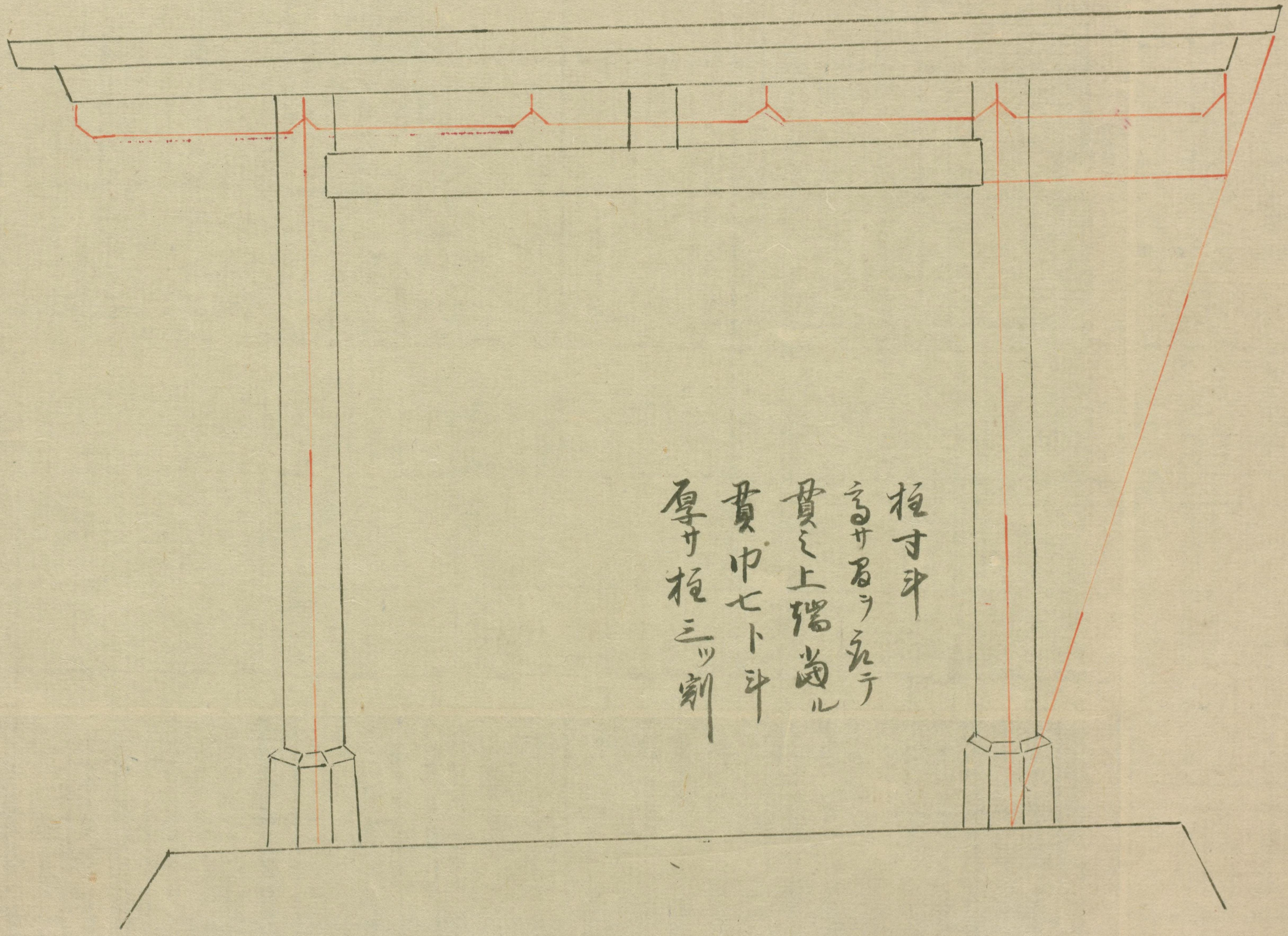
八幡鳥居

反なし
増なし
額なし

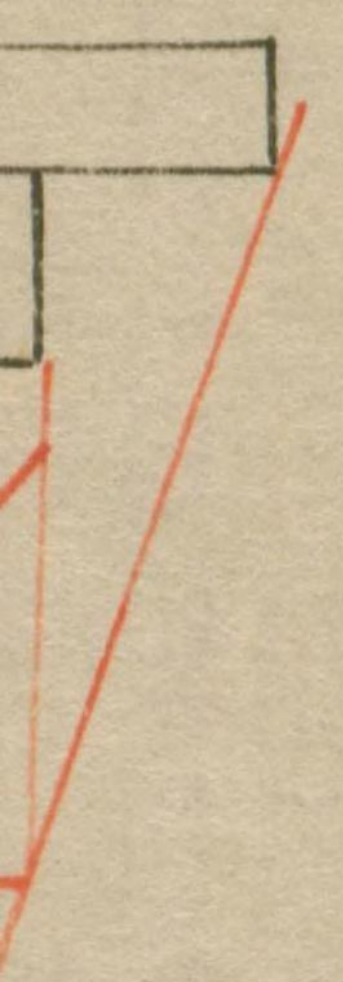
なし

# 春日鳥居

反鵄増なし
柱間七寸斗
貫巾七ト斗 厚サ
柱三ツ割

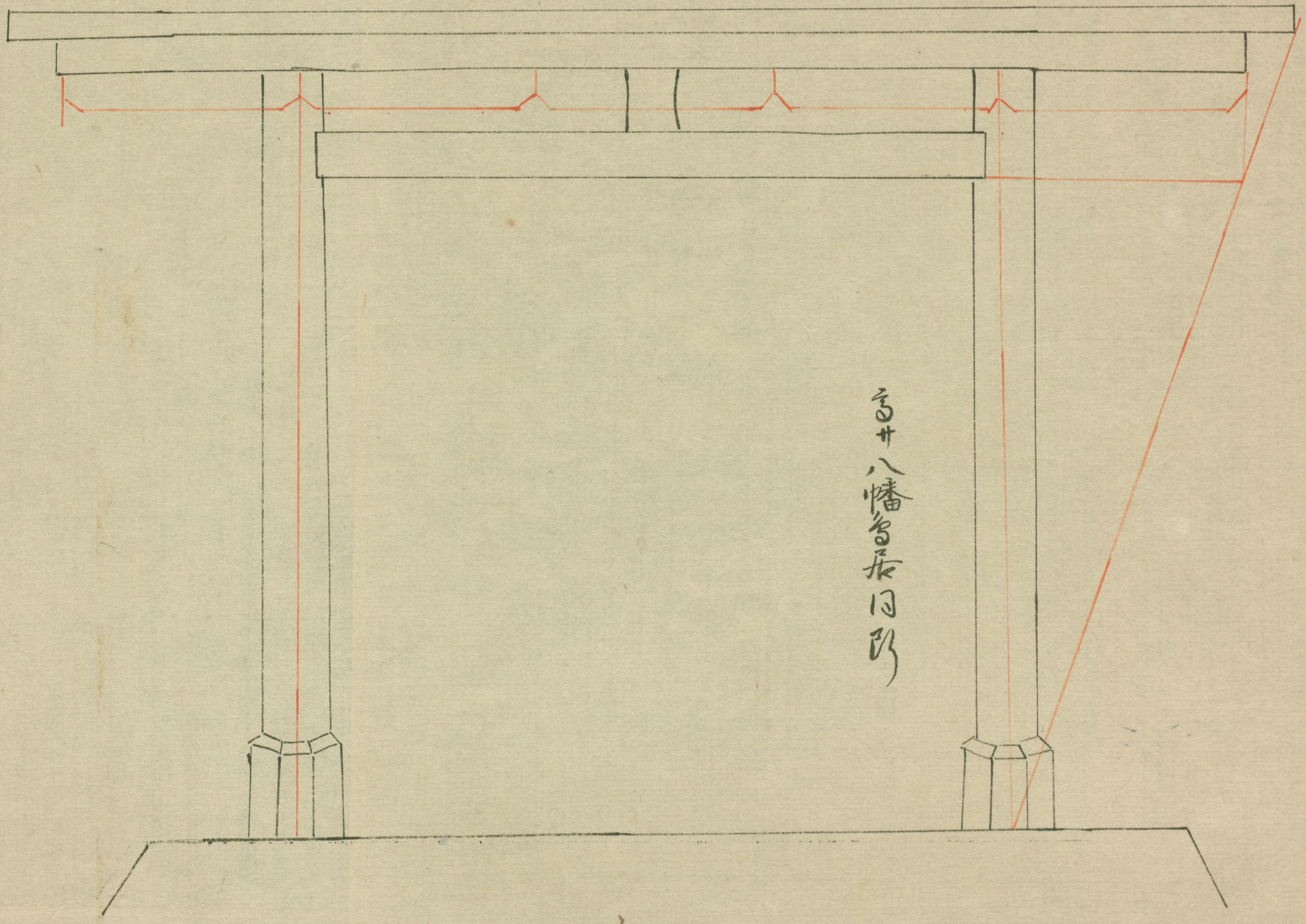


柱寸斗
高サ眉ヲ見テ
貫之上端當ル
貫巾七ト斗
厚サ柱三ツ割



伊勢太神宮鳥居

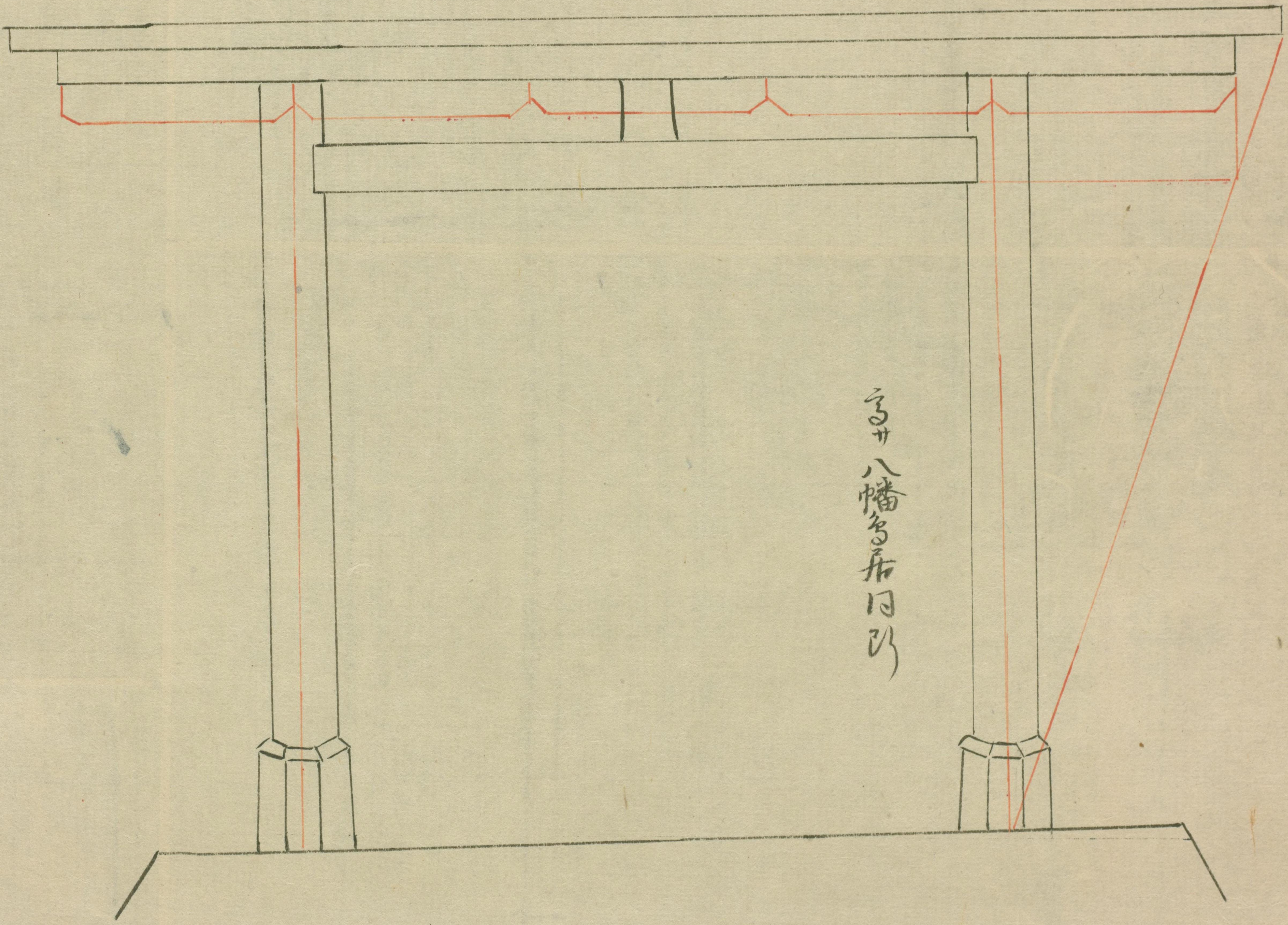
そりなし
ま志なし
志[illegible]ひなし

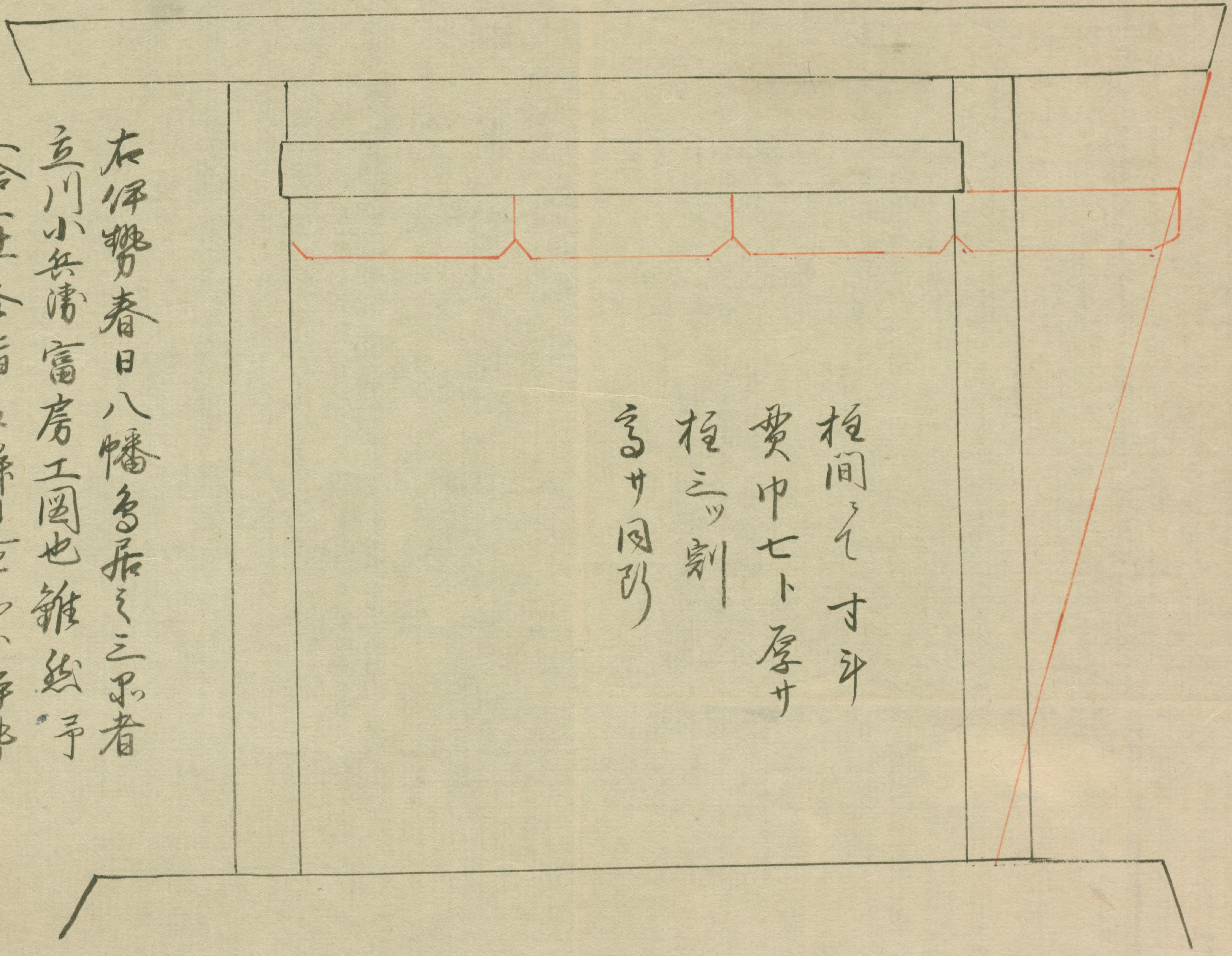

高井八幡鳥居同断

柱三ッ割

伊勢太神宮鳥居

そりなし
ますなし
くさびなし



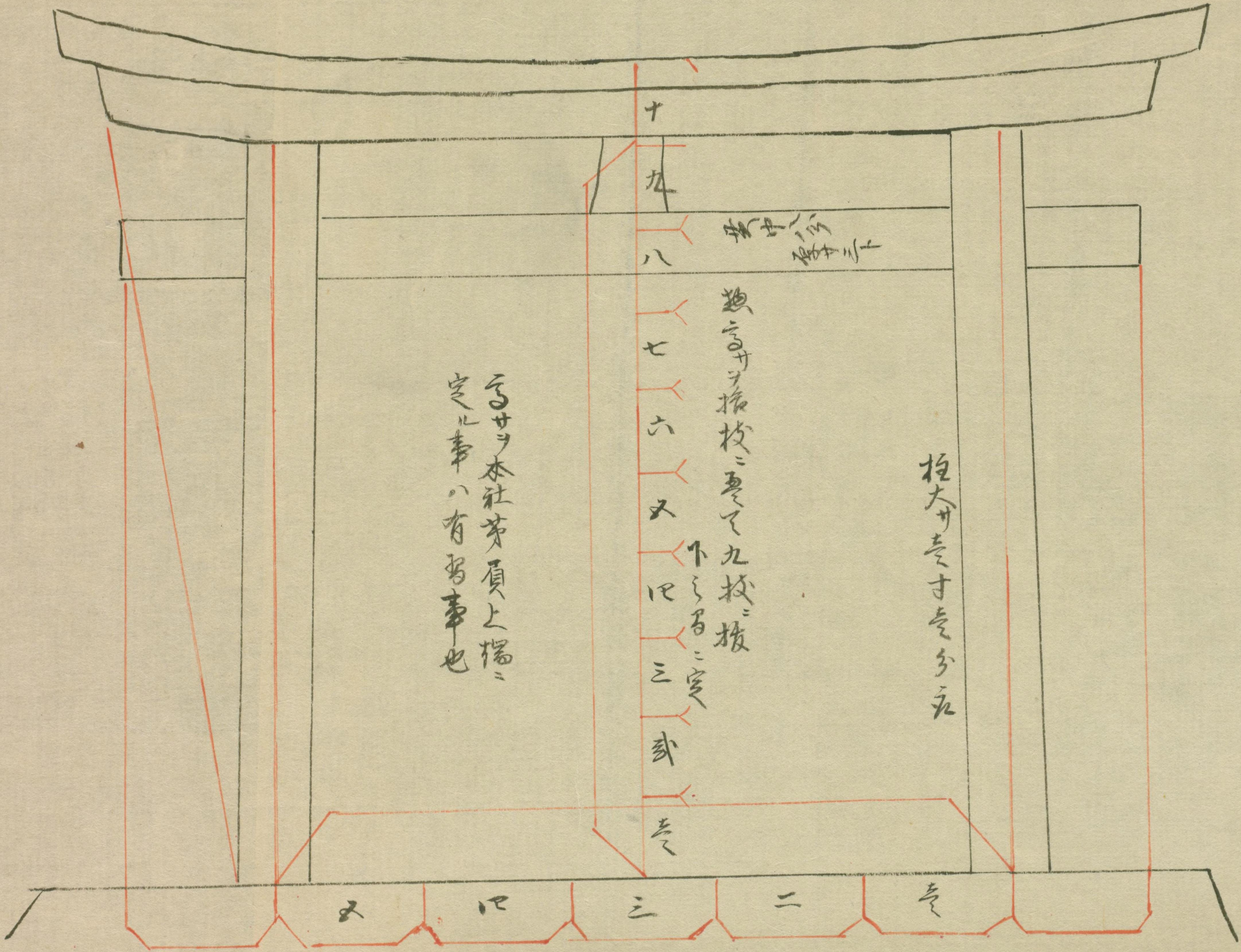

柱間之寸斗
貫巾七ト厚サ
柱三ツ割
高サ同断

右伊勢春日八幡鳥居之三品者
立川小兵衛富房工図也雖然予
二拾二社参詣旨弥見セ志ニ伊勢
両宮之御鳥居ハ稀有 京都石清水
南都春日之御社ニ此鳥居在之両社ハ
皆明神鳥居也故ニ予是を不用

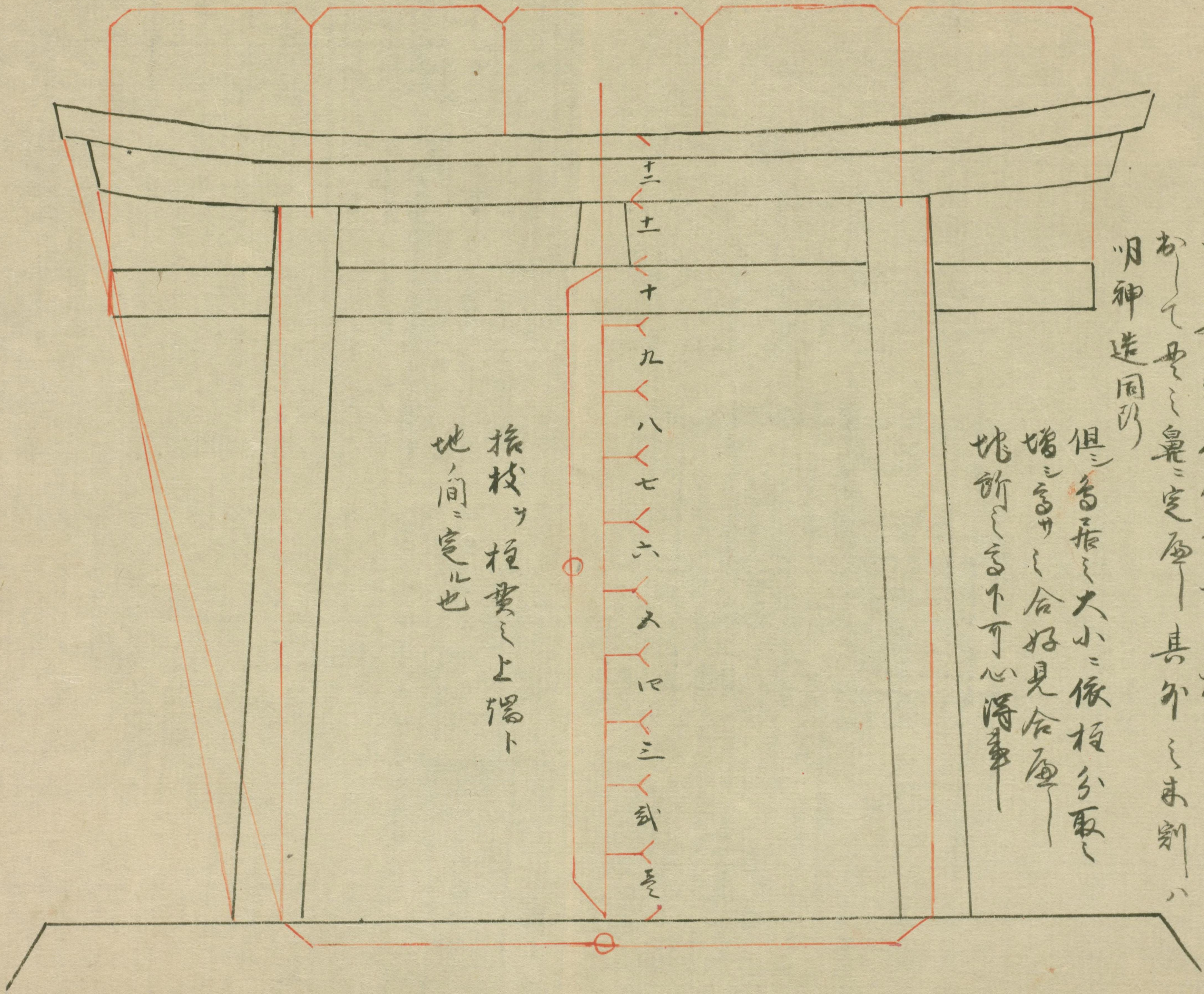
享保二丁酉年九月日於播南壱丁目須原屋治右衛門
冠木セ志横木之雛形鳥居割たニ出ス

一 鳥居之高サ本社前庭之上バと鳥居笠木の上端と同志
高サなり又廣サハ定寸し 又[illegible]

一鳥居之高サ本社茅屓之上ハと鳥居笠木の上端と同し高サを以て廣サを定應し　又指杖書て九枚接中とも下ノ高サを見て柱貫之上端へ當ル大ハ低小ハ高くして取り依高下見合應し　柱之端ニ八ツ　中貫之巾ハ八分厚サハ三分貫のあひ乗之取て柱壹本　貫之長サハ下の高サを五ツニ割壹ト分加し立て両引上貫之長サニ定　冠木九分笠木鳥木之せんハ柱經ハして五ツニ割鳥木三ツ笠木二ツ巾柱之九分　端の増ハ笠木半分反ハ向妻を見さる端の切指ハ貫の端上ハの角と柱元より筋違まて切


十
九
八
七
六
五
四
三
弐
壹
惣高サヲ指杖ニ書テ九枚ニ接
下之高ニ定
柱太サ壹寸壹分五
高サヲ本社茅屓上端ニ定ル事ハ有高事也
五
四
三
二
壹

文政十亥歳穐鳥居雛形圖而
子方子傳


十二
十一
十
九
八
七
六
五
四
三
弐
壱
指杖ヲ柱貫ノ上端ト地ノ間ニ定ル也

保高考ニ本社茅ハ肩ノ上端ト鳥居笠木上ハと同高サニ時ハ茅屋上ハゟ地形迄ノ高サ或十二枚ニ割指杖ヲ立テ柱貫ノ上端ト地ノ間ニ定ムヘシ柱ハ寸尺要ノ時ハ志麻木ノ下モテ柱ノ高サ三ツニ割壹ト分ヲ以テ要ノ基ニ定ムヘシ其外ノ木割ハ明神造同断

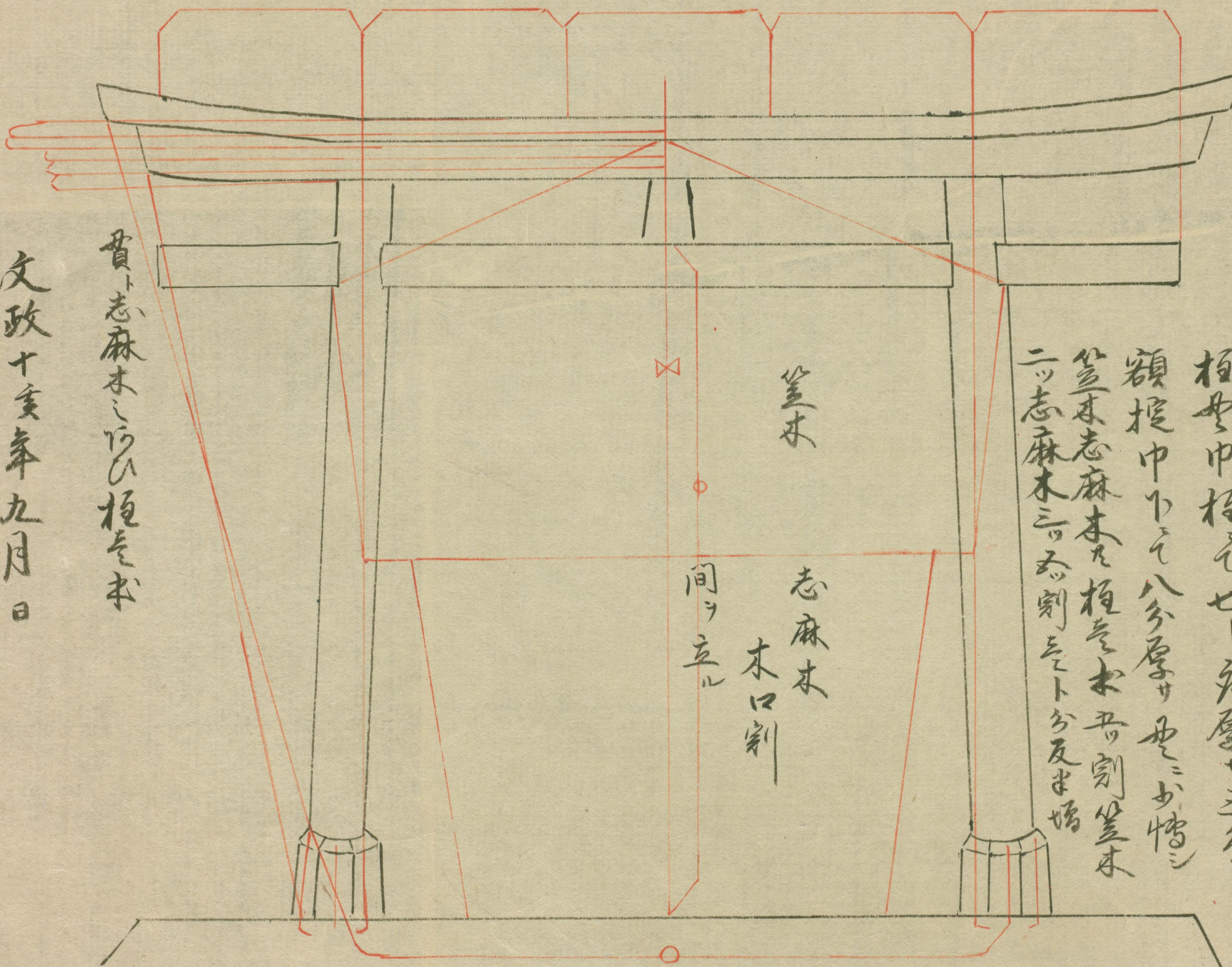
但シ鳥居ノ大小ニ依柱分取シ増シ高サノ合好見合ムヘシ地所ノ高下可心得事

子孝子傳

## 明神鳥居

高サ下ノ間ヲ柱ノ上端ニ立ル
柱ノ太サ明ニ而寸五増柱半分
根包柱裹ノ目八寸
柱巾柱ノ七ト五厚サ三分
額柱巾下ノ八分厚サ巾ニ少増シ
笠木志麻木九柱巻木五ツ割笠木
二ツ志麻木二四ツ六分割壱ト分反ヲ増

柱貫ハ本明キ二ツ割壱ト分本



貫ト志麻木ノあひ柱巻木

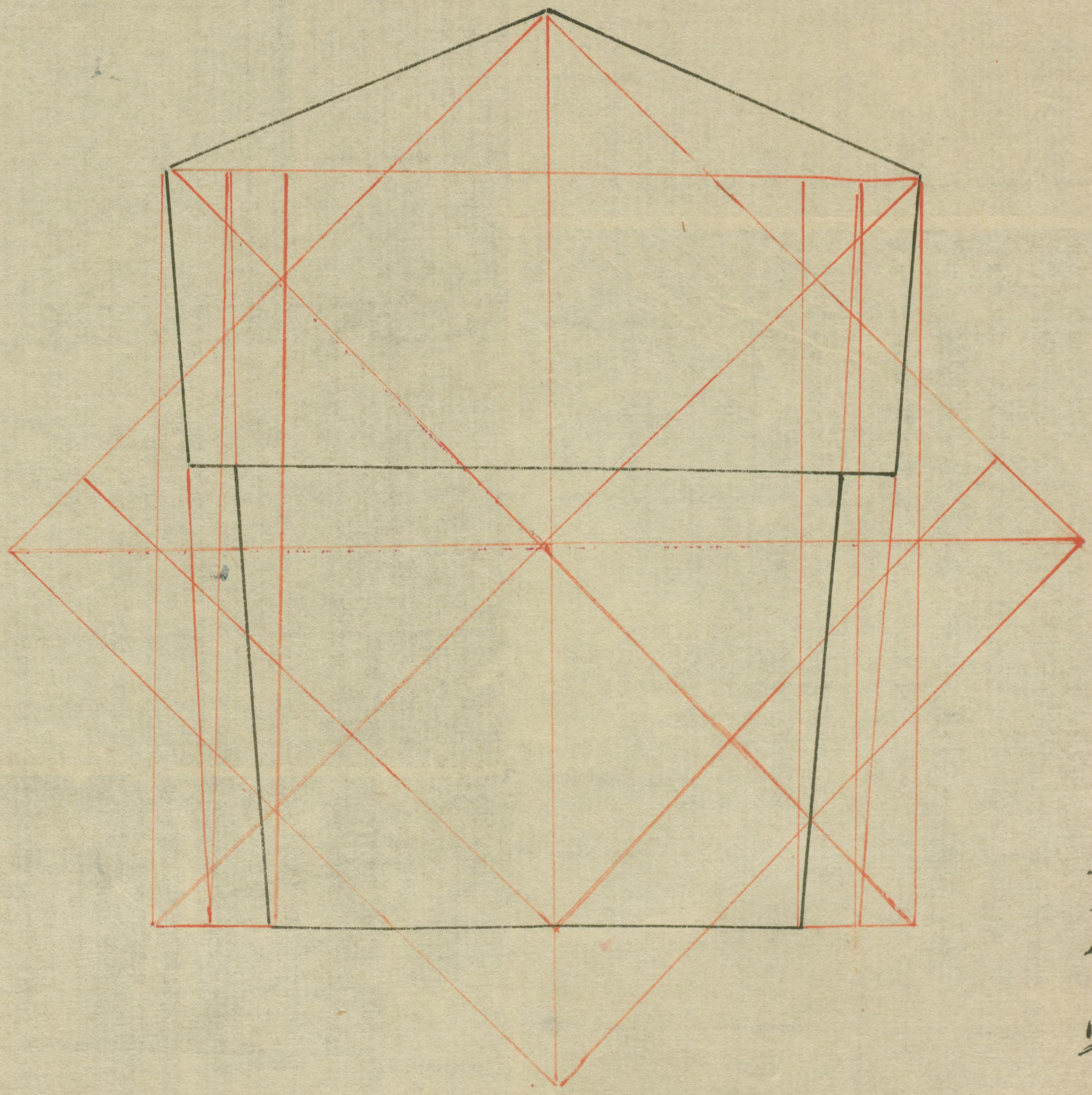
文政十亥年九月日

文政十亥年九月日

鳥居笠木志麻木圧柱壱本七イ九ゝ割笠木二ッ志麻木三ッ
下端七分取

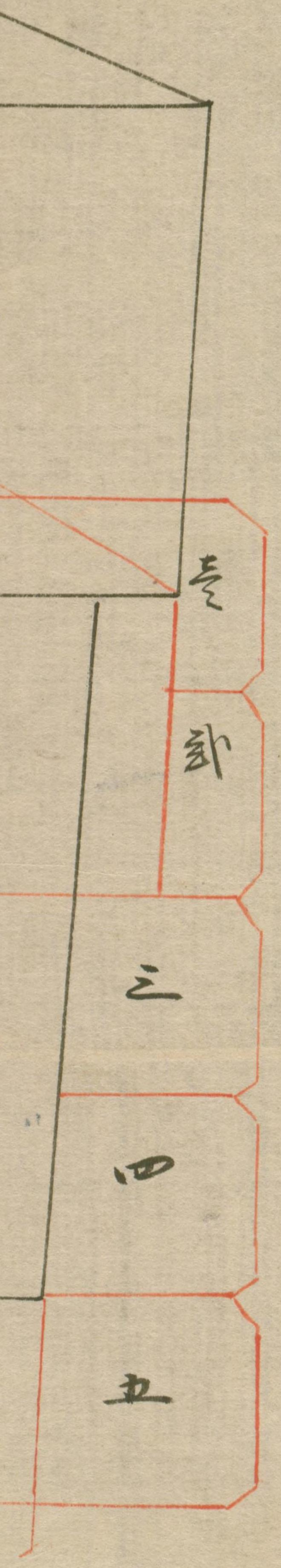
笠木高配四寸

笠木志麻木八角割



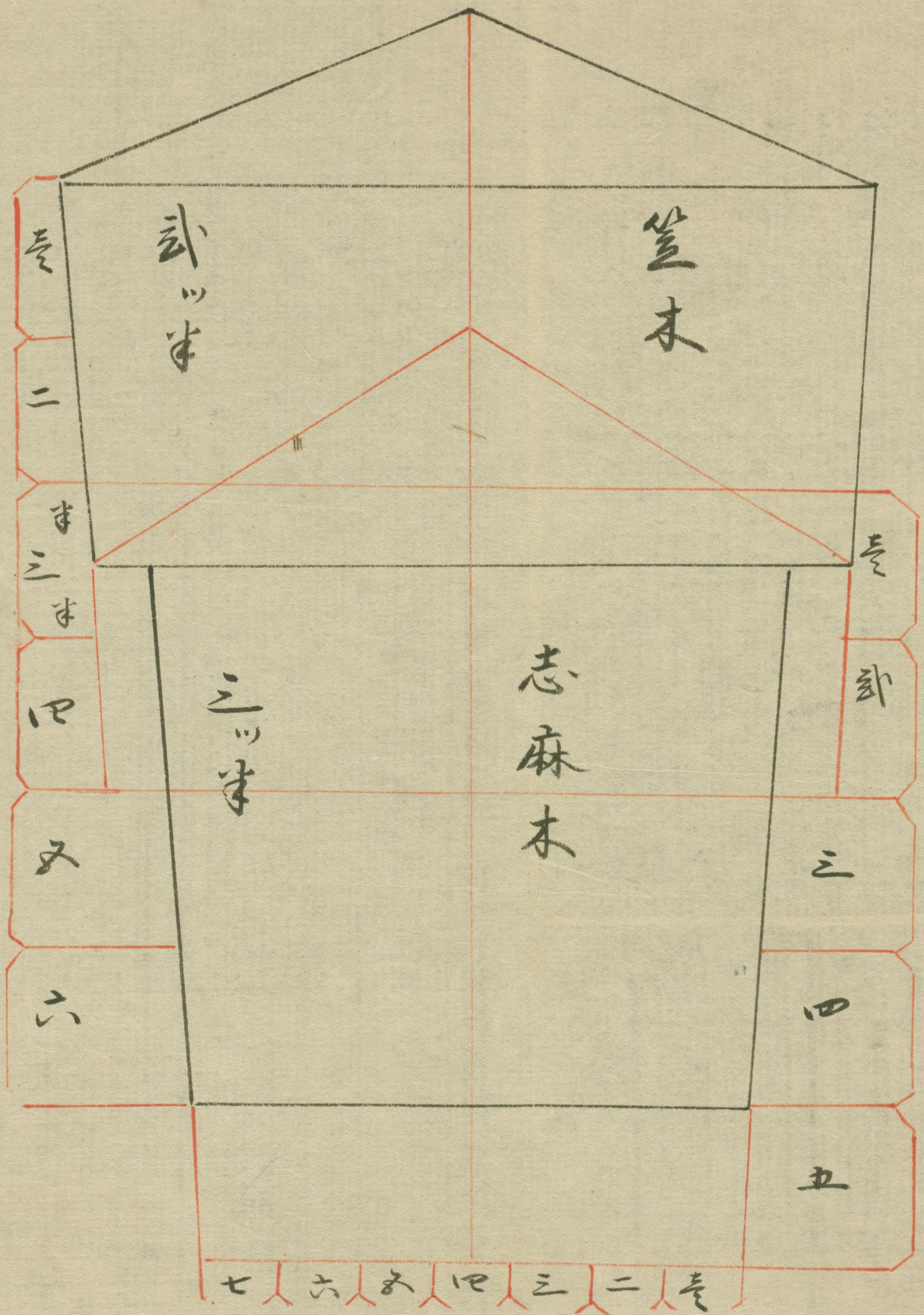
文政十丁亥歳九月日

志麻木笠木反増木口割

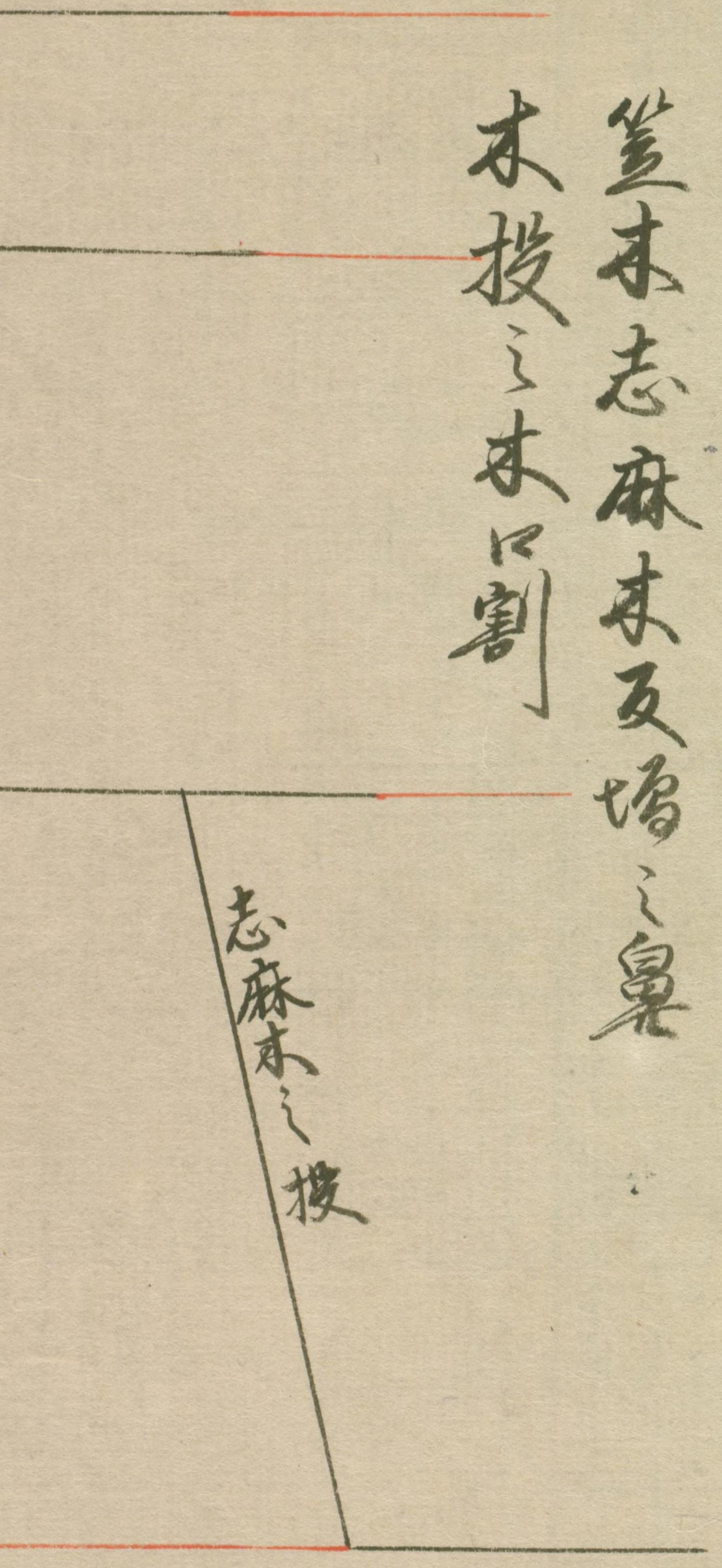


文政十丁亥歳九月　日

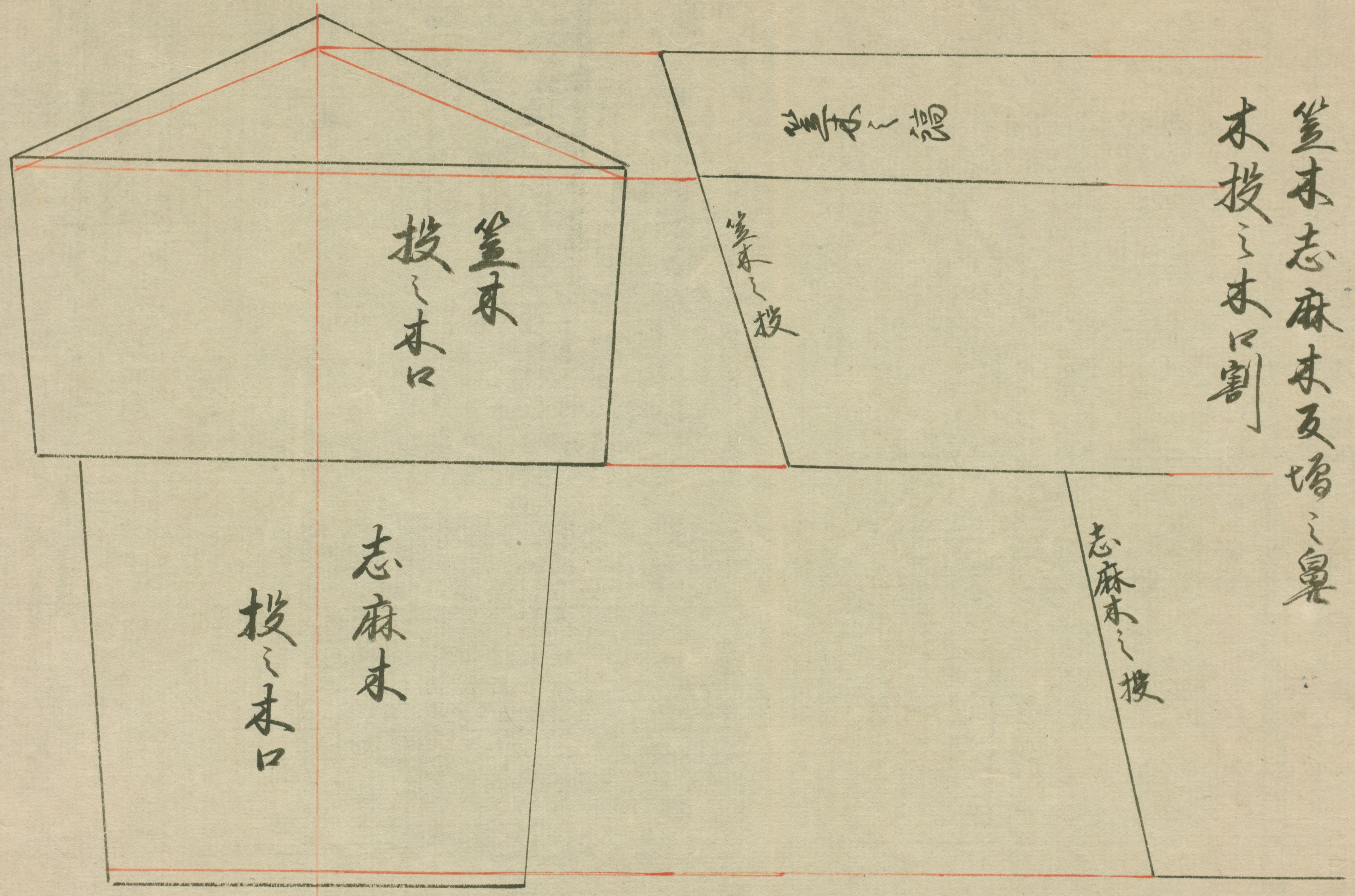
志麻木笠木反増木口割


笠木
弐ッ半
志麻木
三ッ半
壱
二
半
三
半
四
五
六
壱
弐
三
四
五
七
六
五
四
三
二
壱

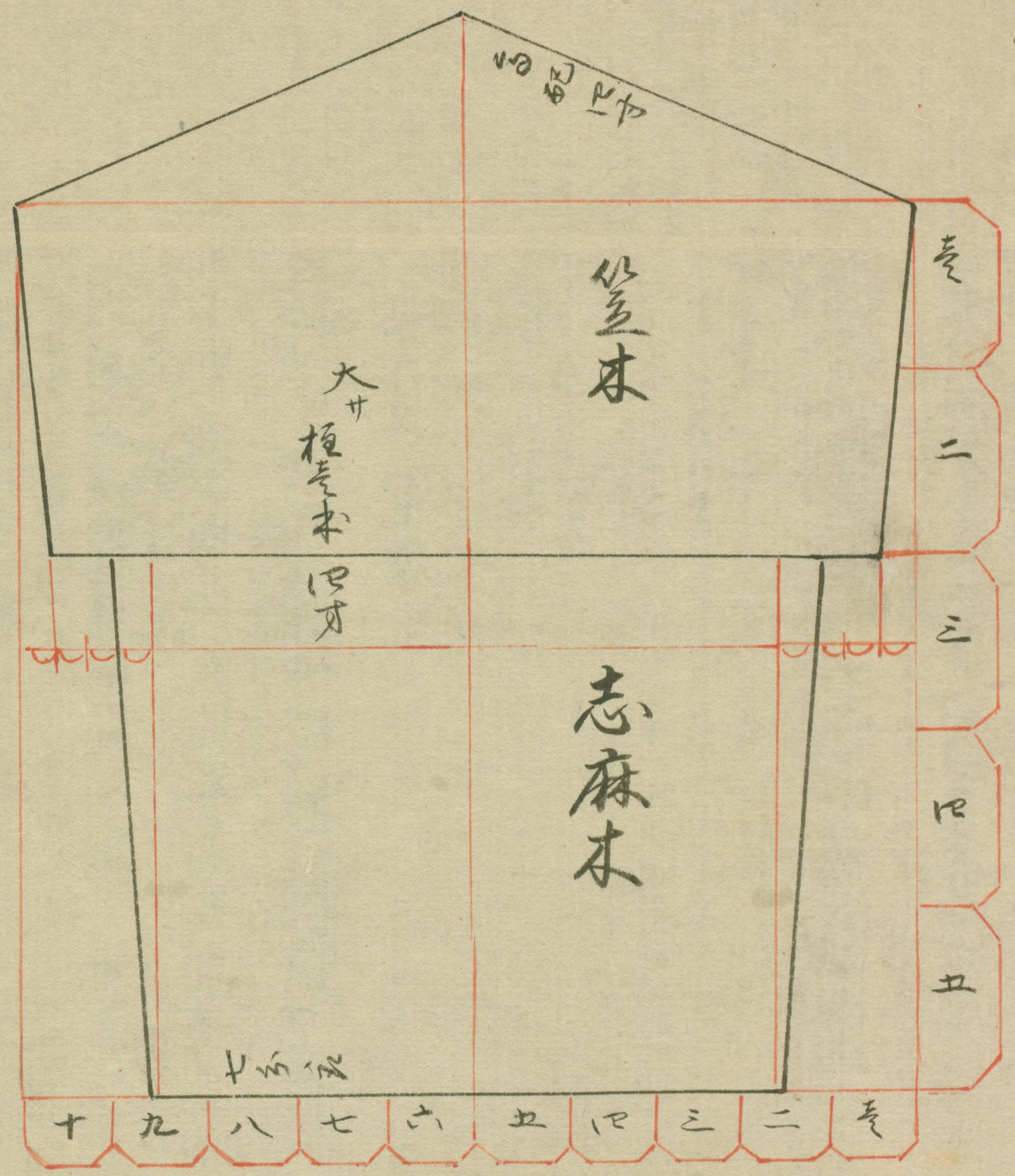
笠木志麻木反増之鼻木投之木口割

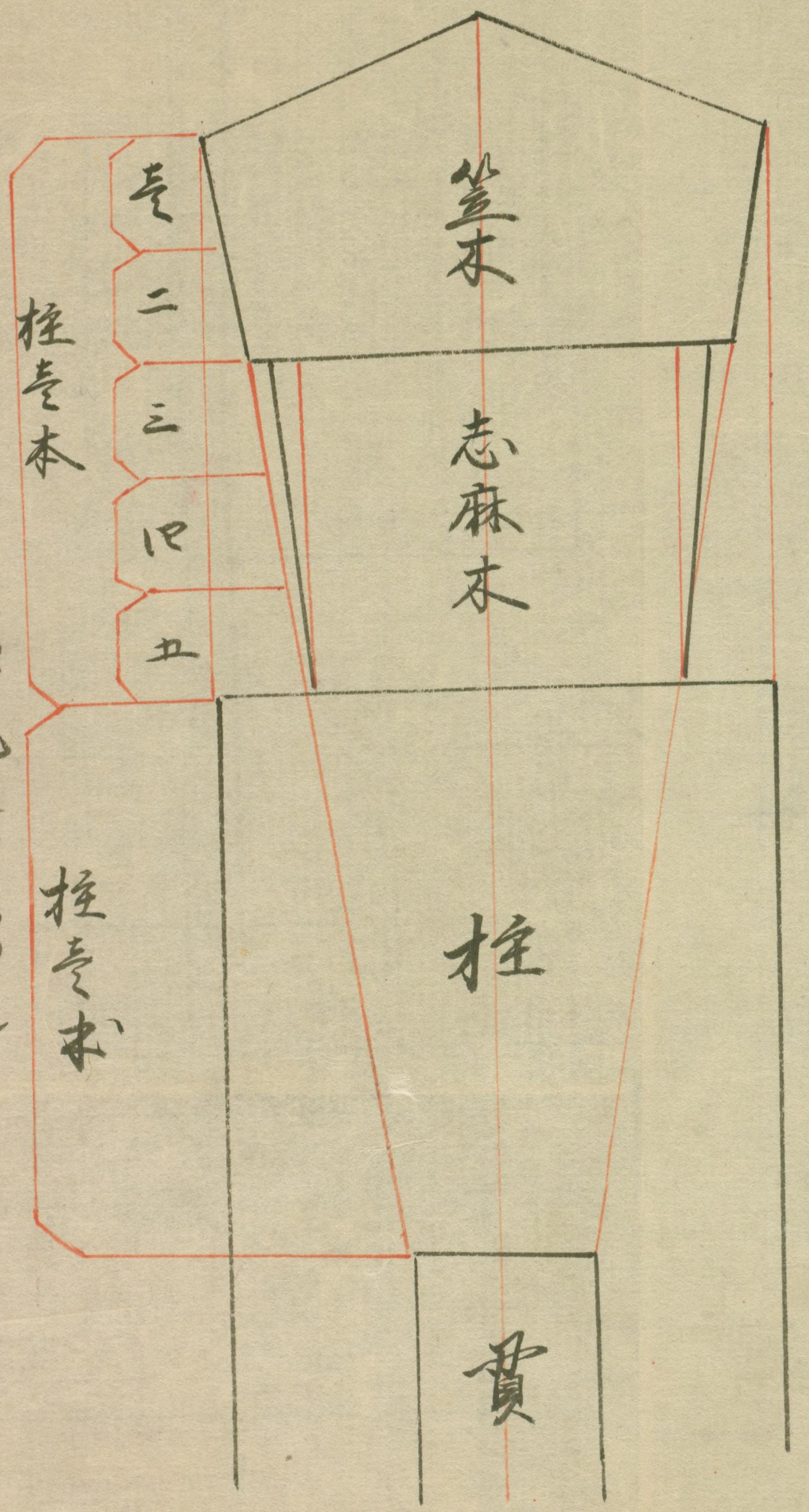


笠木志麻木叉墻之臯
木拔之木口割


笠木之端
笠木之拔
笠木
拔之木口
志麻木
拔之木口
志麻木之拔

## 鳥居木口割


四寸四分
笠木
大サ
柱壹本
四寸
志麻木
十分成
壹
二
三
四
五
十
九
八
七
六
五
四
三
二
壹


壹
二
三
四
五
笠木
志麻木
柱壹本
柱
柱壹本
貫

此木口割者先師先英之傳也

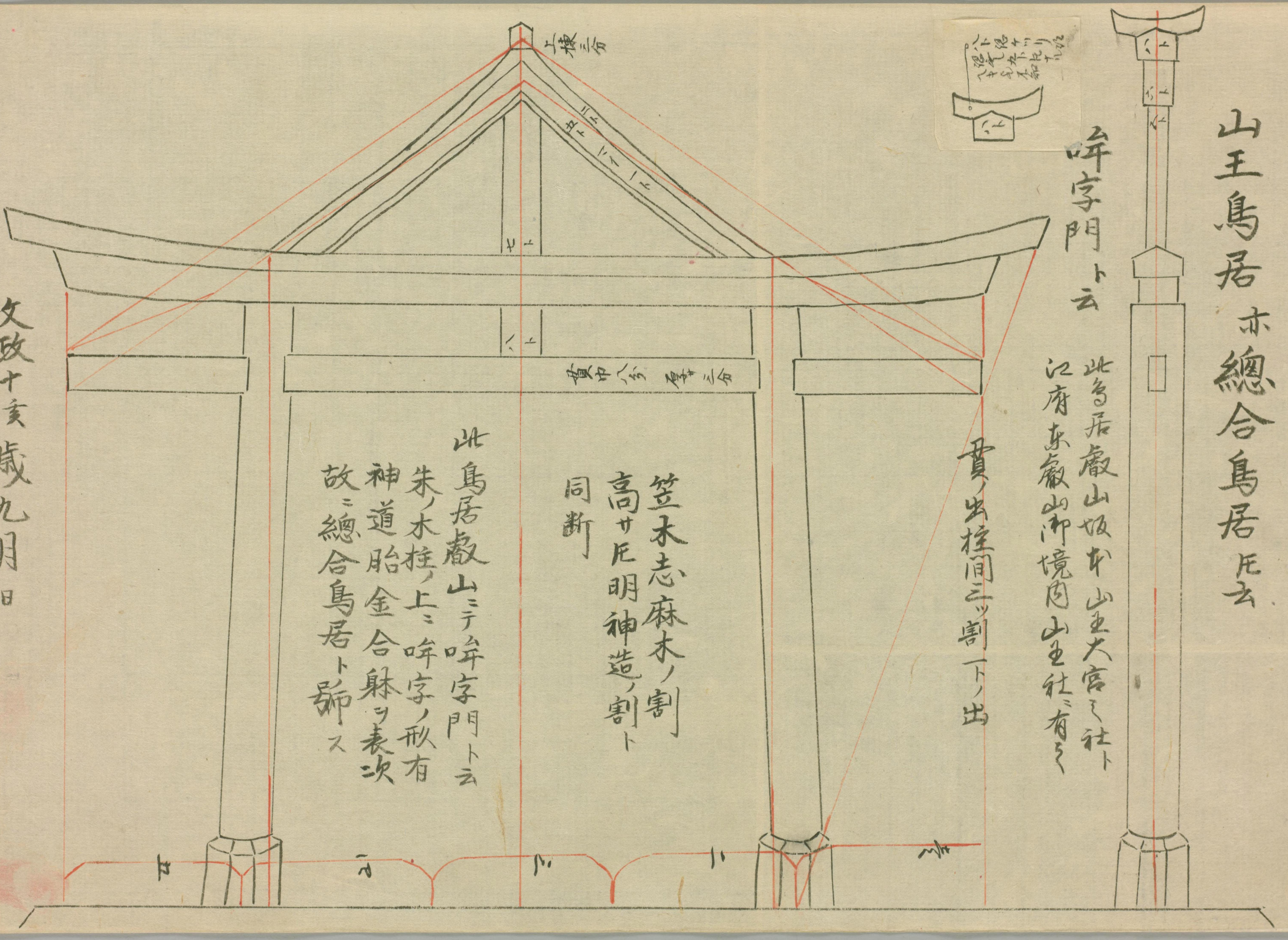
山王鳥居（亦）總合鳥居（トモ云）

此木口割者先師光英之傳也

# 山王鳥居　亦總合鳥居ト云

此鳥居叡山坂本山王大宮之社ト
江府東叡山御境内山王社ニ有之

⿰口弁字門ト云



[illegible]
上棟三分
貫巾八分
厚サ三分
五
四
三
二
一

貫ノ出柱間三ツ割一下ノ出

笠木志麻木ノ割
高サ丘明神造ノ割ト
同斷

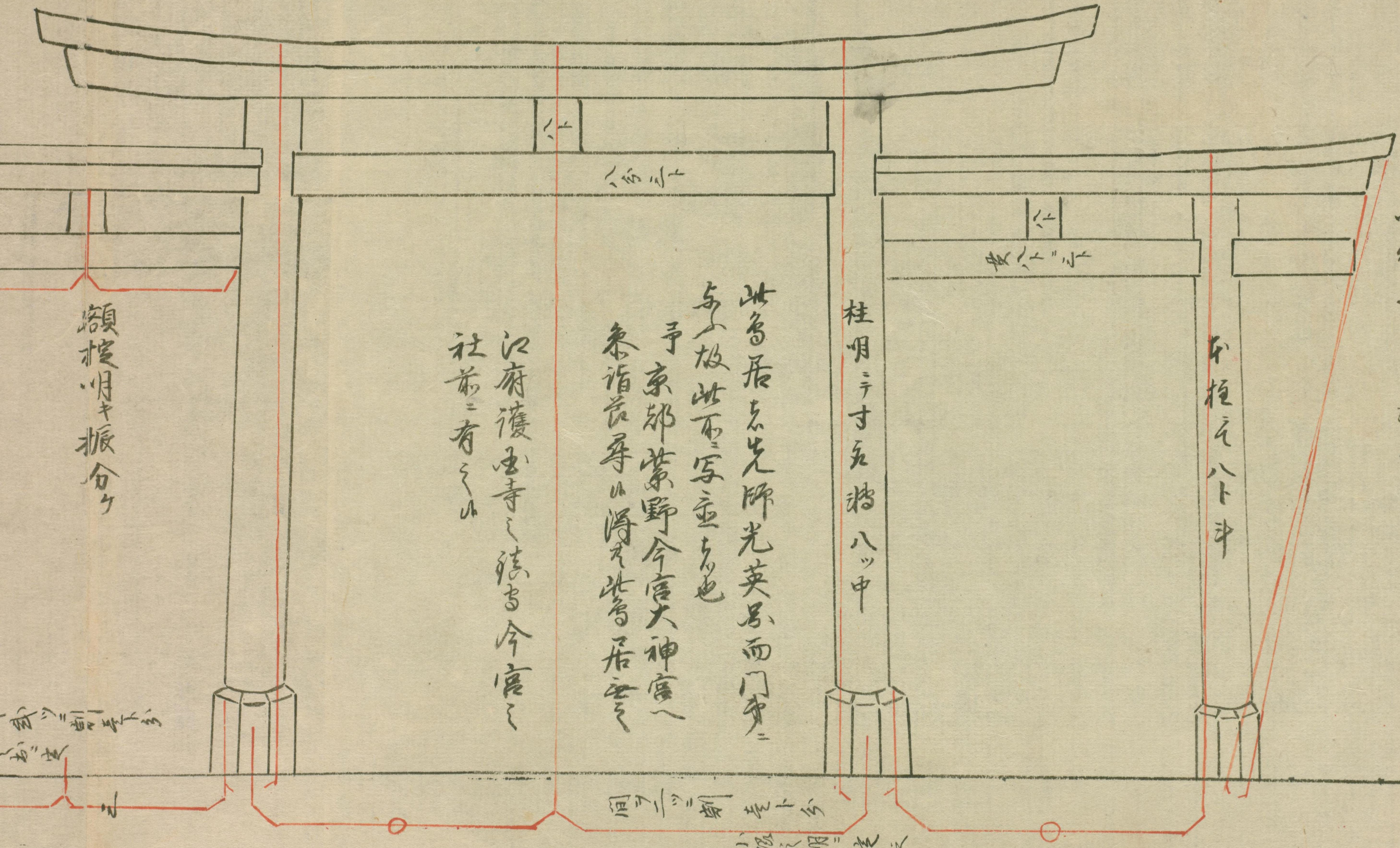
此
鳥居叡山ニテ⿰口弁字門ト云
朱ノ木柱ノ上ニ⿰口弁字ノ形有
神道胎金合躰ヲ表次
故ニ總合鳥居ト號ス

文政十亥歳九月日

文政十亥歳九月日

## 今宮鳥居

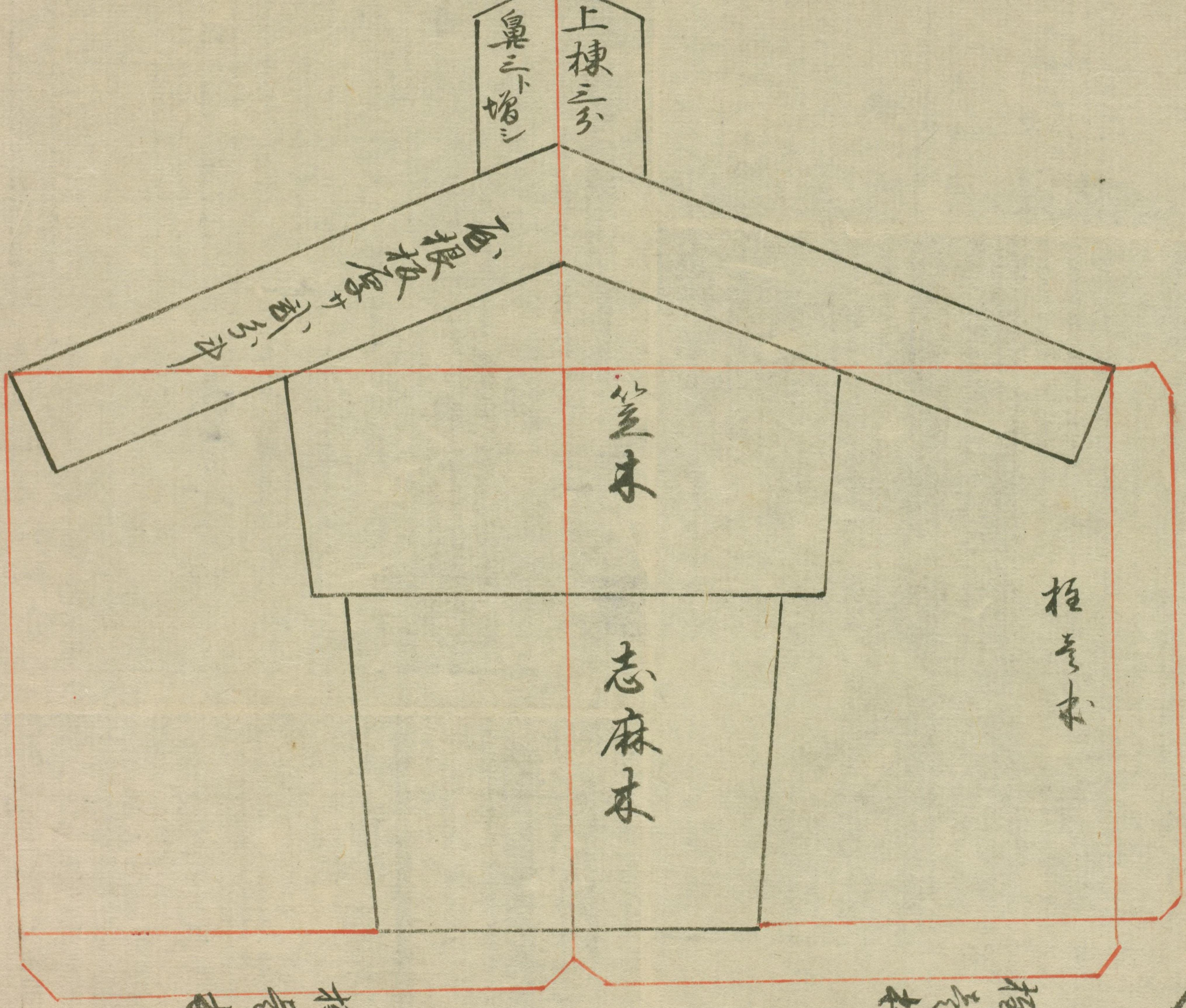
貫ハ高サ志麻木笠木之割
明神造同所猪八ツ中墨之

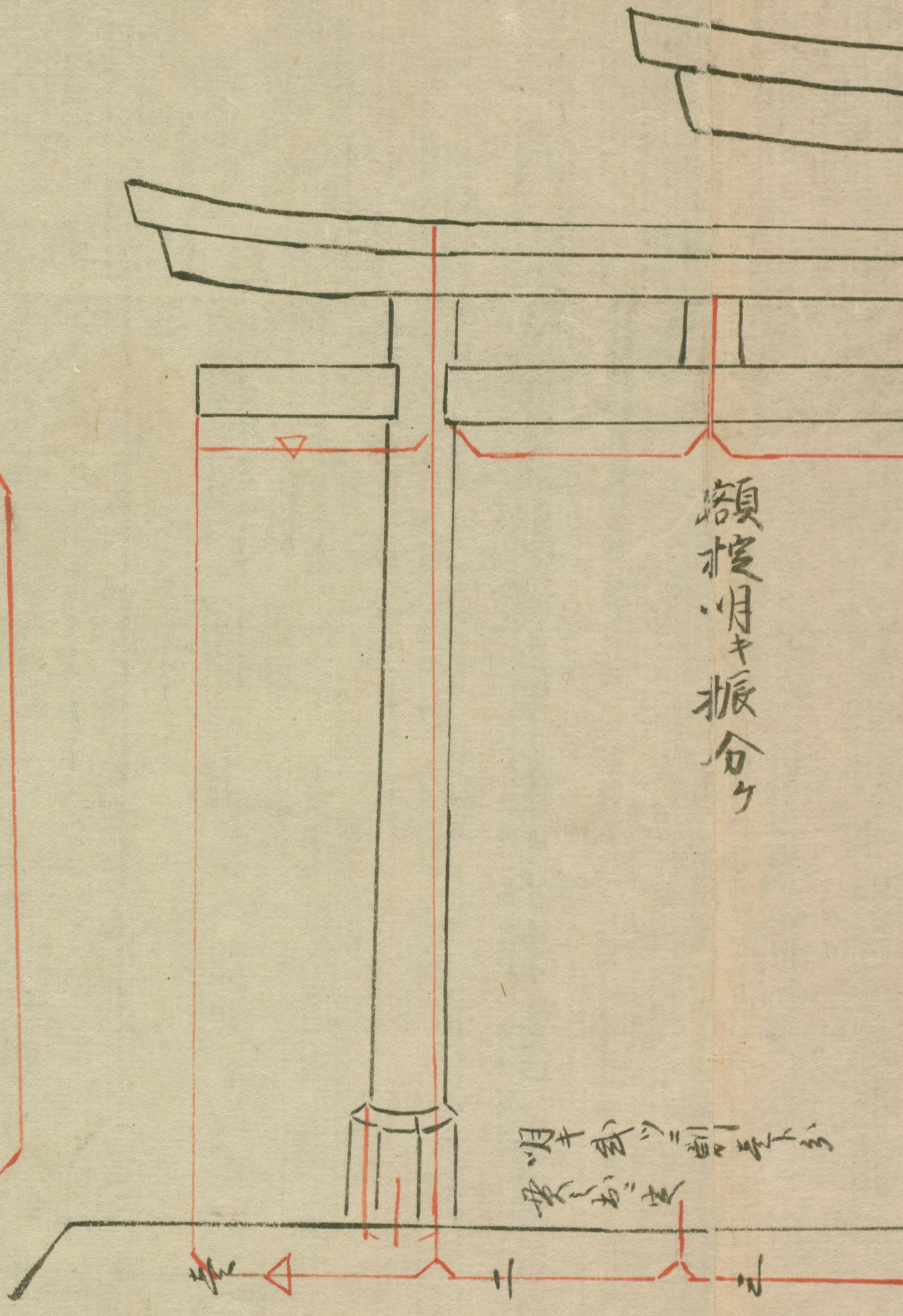

柱明ニテ寸五猪八ツ中
本柱元八ト半
額椗明キ振分ケ

此鳥居者先師光英居西門前ニ
有シ故此所ニ写置者也
予京都紫野今宮大神宮ヘ
参詣茂尋ル得共此鳥居無之
江府護国寺之鎮守今宮之
社前ニ有之也

四足鳥居

亦権現鳥居氏両部鳥居氏

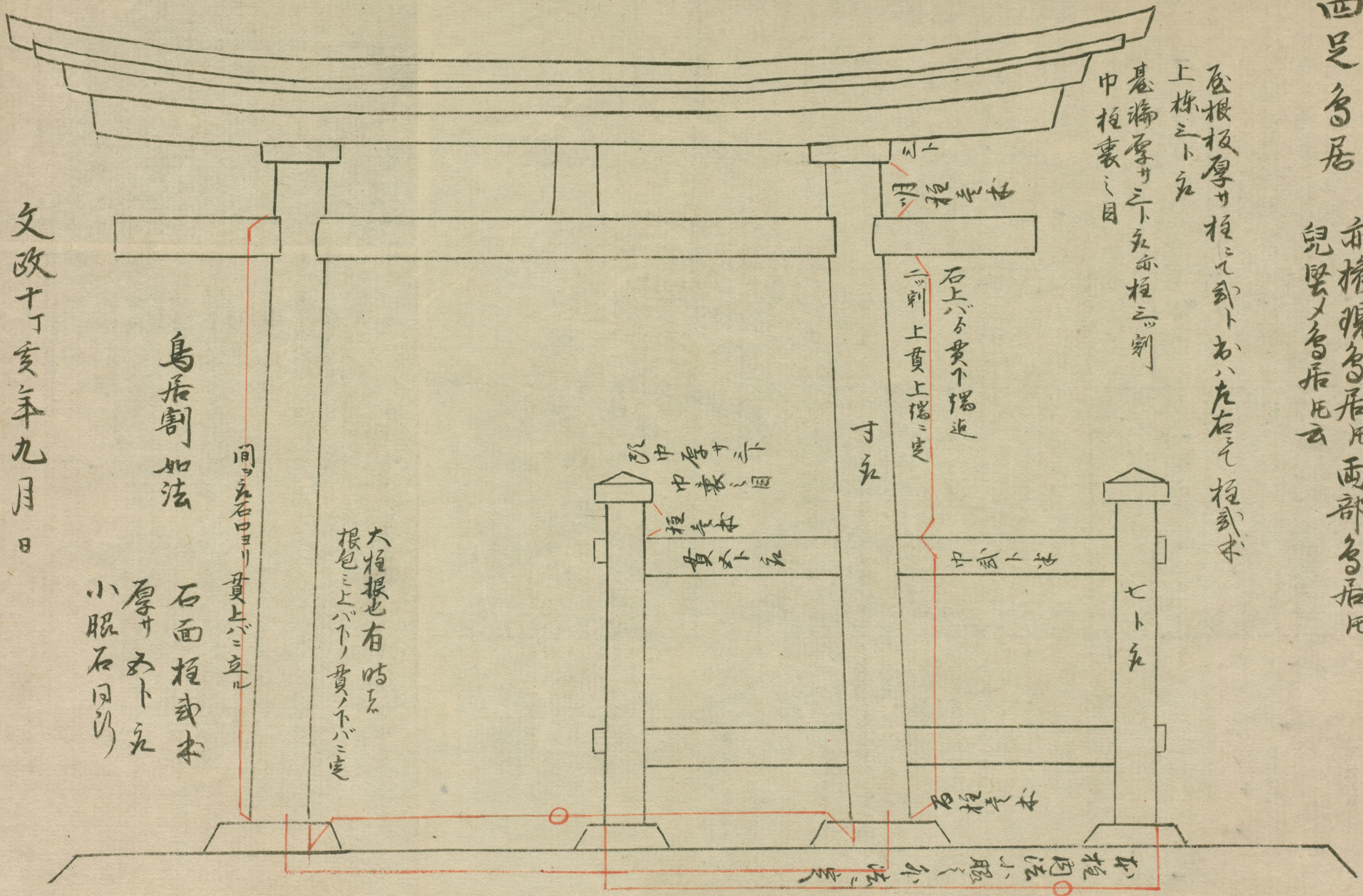

上棟三分
梟三ト増シ
屋根板厚サ弐三分
笠木
志麻木
柱壱本
柱壱本
柱壱本


額椗明キ振分ケ
明キ弐ツニ割壱ト分
貫ニ於ニ定
二
三

## 四足鳥居

赤権現鳥居ト両部鳥居ト
兒堅メ鳥居ト云

屋根板厚サ柱ニて弐ト於ハ左右ニ柱弐本
上棟三ト五
臺輪厚サ三ト五亦柱ニ四割
巾柱裏ニ目


一寸
三柱之本
石上八分貫下端迄
二ツ割 上貫上端ニ定
寸五
此中厚サ三寸
中裏ニ四
柱之本
貫五ト五
中両ト五
七ト五
石柱之本
中柱同法小脇ニ亦法ニ
同ニ石口ヨリ貫上バニ立ル
大柱根包有時者
根包ニ上バ下ノ貫ノ下バニ定

鳥居割如法

石面柱弐本
厚サ五ト五
小脇石同断

文政十丁亥年九月日

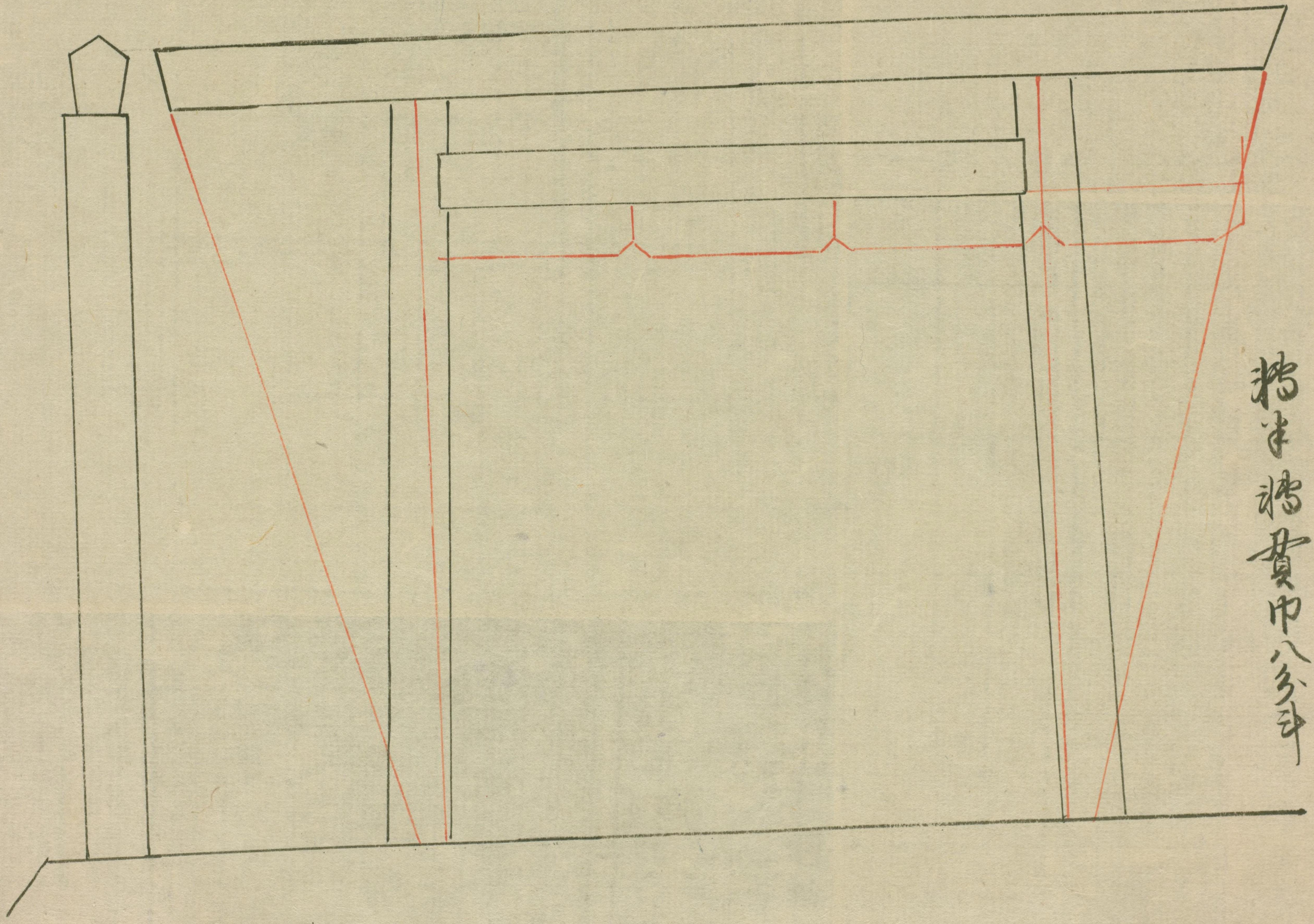
---

## 伊勢太神宮御鳥居

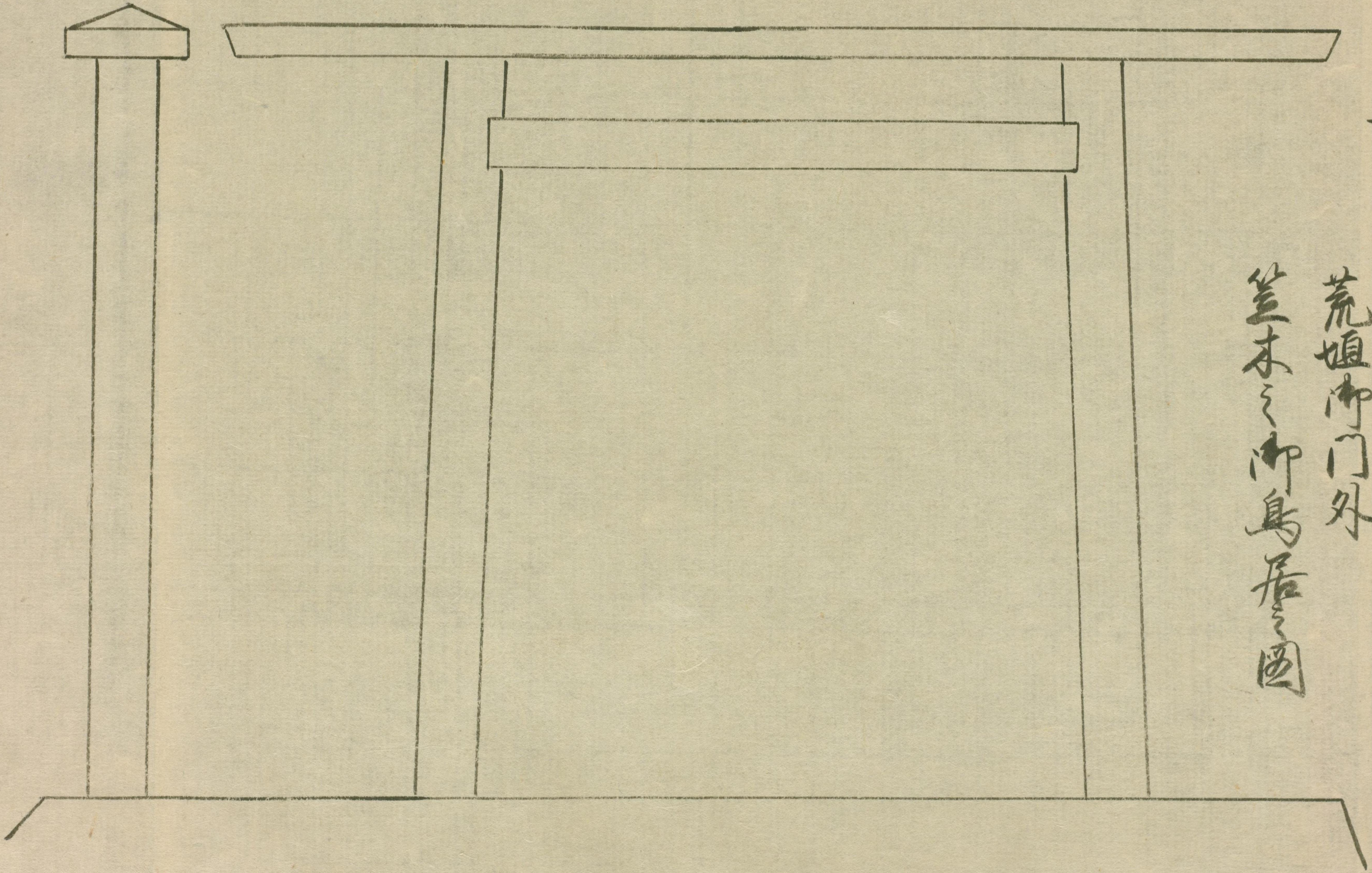
伊勢太神宮御鳥居

内外両宮尺同断

樢半　樢貫巾八分斗



伊勢内宮南御正面
荒垣御門外
笠木之御鳥居之圖



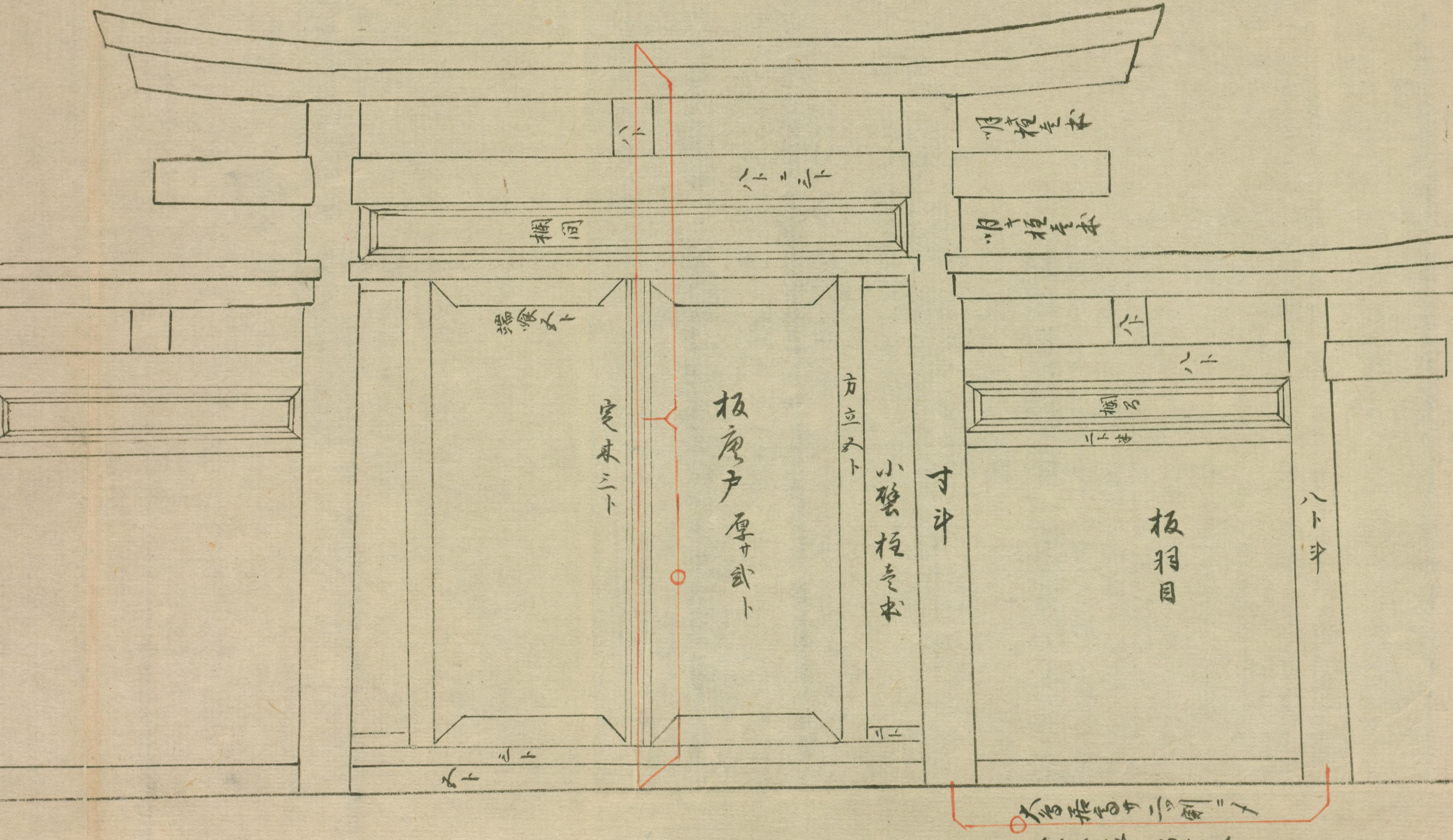
## 三輪鳥居

高廿尺端之木割

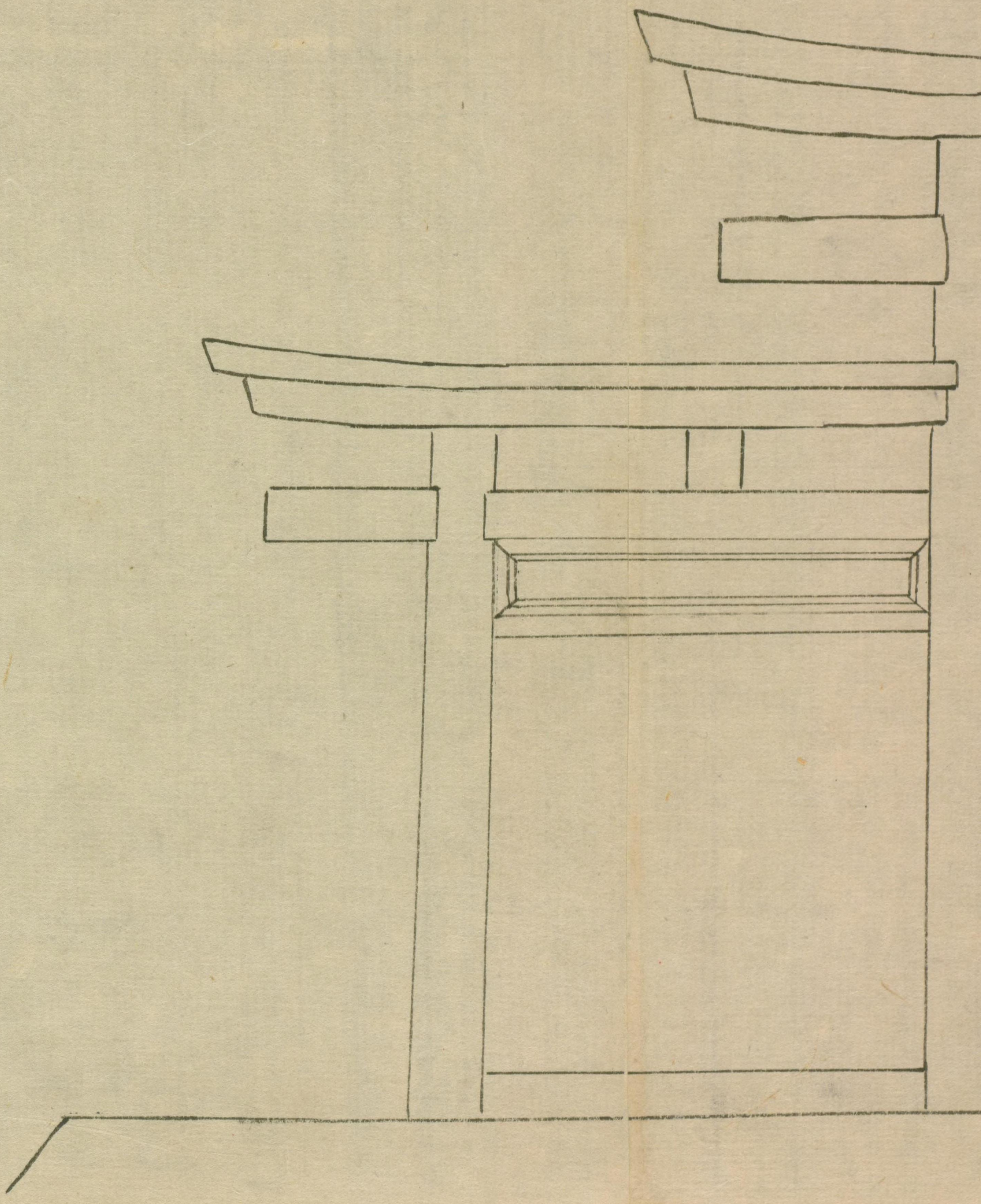
# 三輪鳥居

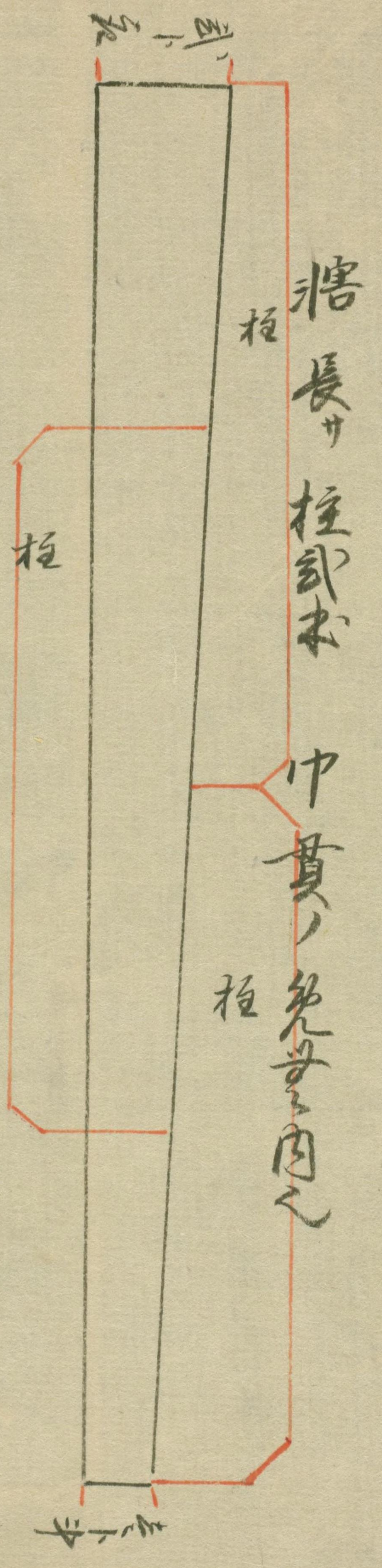
高サ及端々木割
如明神鳥居

轉八ツ中也


八寸
八寸ニ三寸
欄間
端喰五寸
定木三寸
板唐戸 厚サ弐寸
方立五寸
小壁 柱壱本
寸半
明柱壱本
明ヶ柱壱本
八寸
八寸
欄間
三寸
板羽目
八寸半
三寸
五寸
三寸

大ハ両柱ノ面ノサ三ツ割ニメ
壱ト分ヲ脇ハ面ニ定




長サ
柱弐本
中貫ノ
柱
柱
柱

右鳥居之工圖者文政十年
丁亥秋九月應人之需而圖之
忌部保高